

リスク認知を促進する脅威遭遇事例の特徴 —被害者との心理的距離と行動の落ち度に着目した検討—

○長谷部育恵 (京都大学)

楠見 孝 (京都大学)

キーワード: リスク認知, 脅威遭遇事例, 心理的距離

問題と目的

脅威に対する自己の脆弱性(リスク)は, 他者よりも低く見積もられる傾向がある (e. g., Perloff & Fetzner, 1986)。本研究では, 他者の脅威遭遇事例には聞き手のリスク認知を高める効果があるかについて検討する。その際, 事例における (a) 被害者との心理的距離や, (b) 被害者の行動の落ち度がリスク認知に影響する可能性が長谷部・清河・楠見 (2016) において示唆されたため, 以上の 2 点を操作した事例を用いる。これにより, 仮説「被害者に落ち度がないとき, 被害者との心理的距離が近い方が, 遠いよりもリスク認知が高まる」を検証する。

方 法

実験参加者 調査会社の 20 歳から 74 歳のモニター 740 (男性 370, 女性 370) 名が参加した。平均年齢は 46.1 歳 ($SD = 14.6$) であった。

実験デザイン 被害者との心理的距離(親友・一般人)と被害者の落ち度(なし・あり)を要因とする 2×2 の 4 群の実験群, 脅威遭遇事例を読まない統制群の参加者間計画 (各群 148 名) だった。

場面設定 (a) 親友条件は, 親しい友人から食中毒で苦しんだ話を聞いた場面, 一般人条件は, TV 番組にて食中毒で苦しんだ一般人の体験談を聞いた場面であった。また, (b) 落ち度なし条件は, その親友(一般人)が健康管理に努めていて, 生牡蠣や食用食肉などの加熱調理されていない料理を避けていた設定, 落ち度あり条件は, 健康管理に無頓着で, 加熱されていない料理をよく食べていた設定であった。

手続き 参加者は web 上で回答を行った。(1) 食生活や食中毒にかかわるリスク認知 5 項目 (例: 自分にとって, 食中毒は脅威であると思う) に対して, 「1 全くあてはまらない」～「5 どちらともいえない」～「9 非常によくあてはまる」で評定した。(2) TV 番組で体験談を語る一般人, 親しい友人は, 自身にとって近い存在であるか, 「1 全くそう思わない」～「5 どちらともいえない」～「9 非常にそう思う」で評定した。(3) [場面設定] を 1 種類読んだ後, 再度 (1) と同様に評定を行った。ただし, 統制群は [場面設定] を読まなかった。(4) 統制群を除く 4 群は, [場面設定] の被害者の行動に落ち度があったか, (2) と同様の 9 件法で評定した。

結果と考察

条件ごとに, リスク認知 5 項目の回答の度数分布と, 各参加者の評定値の平均値を Figure 1 に示す。統制群を除いて, 被害者との心理的距離(親友・一般人), 被害者の落ち度(落ち度なし・あり), 評定時点([場面設定] 呈示前・後) を要因とする分散分析と多重比較を行

った結果, 評定時点の主効果が有意で ($F(1, 588) = 45.92, p < .0001, \eta_p^2 = .07$), [場面設定] の呈示前よりも呈示後でリスク認知が高まっていたことが示された。また, 被害者との心理的距離と評定時点の交互作用が有意であった ($F(1, 588) = 16.81, p < .0001, \eta_p^2 = .03$)。[場面設定] 呈示前後のリスク認知の高まりは, 被害者が親友である方が一般人であるよりも顕著だった ($ps < .05, \eta_p^2 = .15, .01$)。よって仮説は後半のみ支持され, 落ち度がある場合にもない場合と同様に, 被害者との心理的距離が近い方がリスク認知促進の効果が確認された。なお, 統制群ではリスク認知の 1 回目と 2 回目評定値間に差はなかった ($t(147) = 0.05, p = .96, d = .01$)。

また, 実験参加者は親友の方が一般人よりも心理的距離を近く評定していたが ($Ms = 5.80, 3.64, SDs = 1.78, 1.82; t(739) = 25.01, p < .0001, d = 1.20$), 落ち度の評定については, 被害者との心理的距離, 被害者の落ち度を要因とする分散分析を行った結果, 被害者との心理的距離の主効果が有意であり, 被害者が親友のときに一般人のときよりも落ち度を低く評定していた (親友落ち度なし/ あり, 一般人落ち度なし/ ありの順で $Ms = 3.93, 3.93, 6.08, 6.59, SDs = 1.85, 1.93, 2.02, 1.80, F(1, 591) = 237.46, p < .0001, \eta_p^2 = .29$)。被害者の行動に対する落ち度評定は, 行動それ自体によって左右されるのではなく, 被害者との心理的距離に依存するという危うさが示唆された。

本研究では, 被害者の落ち度にかかわらず, 心理的距離の近い人物の脅威遭遇事例の方が遠い人物の事例よりもリスク認知を高めることが示された。脅威遭遇の体験談を身近な人と語り合うことは, 互いのリスク認知の促進に繋がる。コミュニケーションを通してリスク認知を高める方法を示した点で, 本研究には社会的意義があるといえる。

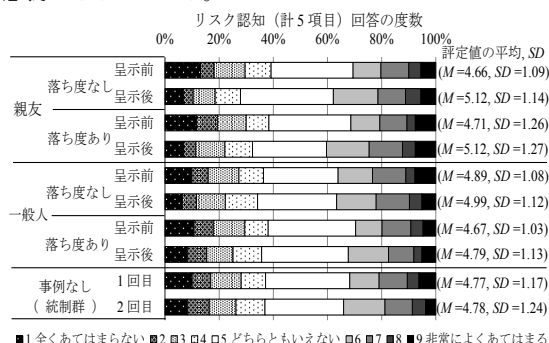


Figure 1 脅威遭遇事例の呈示前後のリスク認知